

ラトナーカラ・シャーンティの三性説

海野孝憲

ラトナーカラ・シャーンティの思想史上における立場が瑜

伽行派にあつたことは彼がその著「般若波羅蜜多論」において終始、自己の立場を「無相論者である唯心論者」の側におき、対論者である中観派に対して強く心所の勝義における實在を主張しつづけた点においても明らかであり、また彼が非常に熱心な弥勒の信奉者であり、著書において幾度も弥勒の名前とその著「中辺分別論」の偈を引用し、その思想を敷衍しつづ、それを自らの思想体系の根幹としていることから立証することができる。従つて彼の三性説は後述するようにも、また彼自らがその著書の中で述べているように「弥勒、無著、世親」の伝統に連なることは言うまでもない。

本論では三性説の資料として彼の著書の中から代表的な次の二論を用いた。

一 Prañāpāramitopadeśa (般若波羅蜜多論) チベット語訳。

二 Madhyamakālamkāra-vṛtti (中観莊嚴注解) チベット

ラトナーカラ・シャーンティの三性説(海野)

ト語訳。

これら二論は作成の意図を異にしているので、その叙述法及び論点のおき方にも自ずから相違があり、三性説については前者は瑜伽行派の立場からそれらを要約しようとする傾向が強いのに対し、後者は三性の有無にのみ注目しそれによつて中道を明らかにすることを意図しておりその方法はまず中観派の論難を想定しそれに反論する形で瑜伽行派の有無観を明らかにするものである。従つて本論は二論の論点の相違に対応して、まず(A)では「般若波羅蜜多論」を中心にしてラトナーカラ・シャーンティの三性説を要約し、続いて(B)では「中観莊嚴注解」を中心として瑜伽行派特有の有無観を明らかにすることを意図している。

(A)ラトナーカラ・シャーンティは三性説を要約するに當つて「解深密経」の三性を述べる箇所を引用しこれに引續いて次のように三性の各々を要約している。

イ、分別性について。

「諸々の經典の中で詳説されているそれらの相をここに要約して説かねばならない。名称を熟知している意言によつて分別された諸法を自性とすそれらのは相 (nimitta) に応じた名称を有するものであるから、分別性である。即ち色、声、眼、鼻等々のようなものである。略して言えば二種のもの、即ち所取と能取である。」(一五六a—八)

ここでは分別性とは「意言によつて分別されたものであり、相 (nimitta) 即ち対境* (alambana) の事物 (artha) に応じた名称を有するもの」と規定され、具体的には十二処、所取能取の二種のものと述べられている。

* *tasya yadalambanam tanmimitam* (Mahayanasutra-alankara XI-38 世親釈)

ロ、依他性について。

「分別性に執着する習気によつて(所取、能取の)二のものが存在しないのに、二のものとして顕現して生ずるが、かの(境である二の)ものが滅せられる時、生じなくなるかの識は因縁に依る故に、一切法の依他性である。」(一五六b—二)

ここでは依他性とは「分別性である所取、能取の滅によつて生じなくなる識であり、境等という他の因縁に依存して成り立つるものと規定されている。

ハ、真实性について。

「更にかの依他性がかの分別性によつて常に空であり、寂靜であり、遠離されているそのものは常にこのようにのみ成立しているもので、一切法の真实性である。」(一五六b—三)

ここでは依他性すなわち識が分別性すなわち境の無によつて空となつているものが真实性であると述べている。

更に「中観莊嚴注解」においては「中辺分別論」相品、第五偈に非常によく似た次のような偈を引用し三性の各々を説明している。

『これら分別と依他と眞実とは分別されたものと因縁より生じたものと不変異のものである故に、順次に』と説かれている。この三性は順次に分別性と依他性と眞実性という名称を有している。(三性は)迷乱に於て増益されたものである故に、因縁より生じたものである故に、不変異である故にという順序の如くである。更にかの依他性は無なるものを増益するから虚妄分別である。』(一一八a—七)

ここでは更に三性の各々について、分別性とは分別されたもの即ち対境であること、依他性とは因縁より生じたものであると共に、無なるものを有なるものと分別する虚妄分別であること、眞実性とは不変異なるもの即ち空性であることを明示している。

(B)次に瑜伽行派の有無観を明らかにするに先だつて、「般

「若波羅蜜多論」により瑜伽行派の主張を要約しよう。

「その中、第一のもの（分別性）は諸々の凡夫によつてそのよ
うなものとしてのみ仮設されているので仮有の故に実有ではな
く、勝義としては有でもない。第二のもの（依他性）は縁生の故
に実有であり仮有ではない。第三のもの（眞実性）は清淨なる境
として了別されるので勝義として有である。」（一五七 a—六）

これによると瑜伽行派では分別性は仮有であり勝義として
は有ではない。依他性は実有であり仮有ではない。眞実性は
勝義としては有であると要約することができる。この中でラ
トナーカラ・シャーンティが特に力説した依他性の実有は、
これを仮有、即ち世俗としては有であるが勝義としては無で
あると主張する中観派との間の激しい論争の基因をなすもの
である。これに対する中観派の論難は通常、次のように展開
されている。

「ある中観論者は言う。『世間に於て名称をもつて呼ばれるも
のは世俗のものであり、外境も世間に於て名称をもつて呼ばれる
ものであるから、心心所のように、それも世俗として有である
が、勝義としては劍の刃、が（刃）自らを切る矛盾のように、心
心所が自証することには矛盾があり、他証も損壞のみであること
は我々が共に認めるところである。』と」（一七三 a—一）

すなわち中観論者の論難はあくまで依他性の勝義としての
有を否定するものであり、これに対するラトナーカラ・シャ

ーンティの論鋒は「中観莊嚴注解」に於てはこのような中観
派の主張に反論する形で展開される。

「もし勝義としては無であるが、世俗としては有であると言
うならば、それは正しくない。車の支分が有る時、（それは）車と
して仮設される。同様に蘊が有る時、（それにおいて）人を仮設
する。全く無なる時には何に由り、何を仮設するだろうか。もし
全く有でもなく無でもなく中道であつて、全く無ではないと我々
（中観派）は説くと言ふならば、これも又、不合理である。有と
無とは相互に他を排除する一つの特相を有するので、一方の滅に
よつて、第二のものが示めされるので、二つのものの滅は不合理
である。」（二一〇 a—四）

ここでは中観派の主張するように、世俗として有であり勝
義として無であるならば、全く無なるものに於て何も仮設で
きないであろう。譬えば車の支分が有る時には、それに於
て車が仮設されるが、車の支分が全く無い時には、車はそれ
に於て仮設されないようにと反論している。もし中観派が全
く有でもなく無でもなく中道であるから、全く無ではないと
主張するならば、それは不合理である。何故ならば、有と無
は相互に他方を排除しあう概念であるから、有でもなく無で
もないということは決して一方だけが全く無ではないという
ことを意味しないからであると中観派の主張の矛盾を指摘し
ている。

「中観莊嚴注解」は更に反論する。ここでは冒頭に中観派の始祖とされている竜樹の「中論」を引用していることは注目すべきである。

「これ(中観派の主張)に対して竜樹の回答がなされている。『縁起なるそれは空性であると言われる。それは相対の仮設であり、それは中道である。』依他性が縁生である時、それに於ては分別性は無いからである。いかにして縁生なるものに於て損減がなされるか(と言えば)、(依他性に於て)仮設されたかの取蘊も又、縁生であり、虚妄分別が有る時、それが取蘊等を仮設するからであると考えられる。『縁起であるそれは中道である』とはこのように考えられる。今別性が全く無い時、依他性は無ではなく、それ故に中道であるという意味である。それ故に(所取、能取の)二のものは無であると説かれるから、それ故に虚妄分別は有である。何故ならばそれ(虚妄分別)に於て有であり、かの分別性は有ではなく、依他性が無ではないということが中道であると確定している。」(二二〇a—七)

ここでは有無の中道ということを依他性の有と分別性の無という相関的な有無の関係において捉えている。ラトナーカラ・シャーンティの主張の基本となるものは依他性の実有であつて、その主張を要約すれば、五取蘊等の分別性は依他性なる虚妄分別によつて、または虚妄分別に於て仮設されたものであり、虚妄に分別されたものであるからそれは無である

が、その所縁である依他性は決して勝義として無なるものではないというものである。

(A)さて以上の資料によつてラトナーカラ・シャーンティの三性説を整理すれば次の如くであり、それが「弥勒、無著、世親」の伝統に連なることは極めて明白である。

イ、分別性とは、(1)意言によつて分別されたもの、(2)対境の事物に応じた名称を有するもの、譬えば十二処、二取のようなもの、(3)迷乱に於て増益されたものの三つであり、要約すれば「分別された対境」を意味する。

ロ、依他性とは、(1)分別性である所取、能取の滅により生じなくなる識、(2)因縁により生じたもの、(3)無なるものを増益する虚妄分別の三つであり、要約すれば虚妄分別、識を意味している。

ハ、真实性とは、(1)依他性がかの分別性によつて常に空なるもの、(2)不変なるものと言われており、空性を意味している。

(B)三性の有、無について整理すれば次の如くである。

イ、分別性は仮有であり、勝義としては有ではない。

ロ、依他性は実有であり、勝義として有である。

ハ、真实性は勝義として有である。